

氏 名 川口 洋平

学位（専攻分野） 博士（文学）

学位記番号 総研大乙第 187 号

学位授与の日付 平成 20 年 9 月 30 日

学位授与の要件 学位規則第 6 条第 2 項該当

学位論文題目 港市長崎の成立と変容－海域考古学研究序説－

論文審査委員	主査	教授	小野 正敏
		教授	久留島 浩
		教授	小島 道裕
		教授	佐伯 弘次(九州大学)
		教授	谷川 章雄(早稲田大学)

## 論文内容の要旨

本論文は、16世紀後半にポルトガル船が入港し、港市へと発展した長崎の成立過程とその後の展開、その特性や意義について、考古学の方法、資料によって論じたものである。長崎は、従来、いわゆる鎖国時代の数少ない海外への窓口として、主に文献史の視点から研究が行われてきたが、近年、長崎市街の発掘調査が進展するにつれ、考古学的成果による研究がみられるようになった。しかし現時点では、出土遺物などの各論にとどまっており、港市としての成立や展開、あるいはアジア海域史における長崎の位置が総体的に論じられたことはなかったといえる。

本論文では、このような状況を踏まえた上で、長崎が東シナ海域のひとつの港市として存在し、この海域の機能や様相の変化と共に長崎も変化したと仮定し、以下の課題を設定し、本論として第4章にわたって検討を行っている。さらに付章として、海を前提とした港市や沈没船の新たな視点からの資料論を展開し「海域考古学」を提唱する。

- ・長崎開港以前の九州沿岸部と島嶼部の考古学的な特質
- ・考古学からみた港市長崎の様相と展開
- ・海域の変遷と港市長崎の位置

第1章「古代における九州沿岸部・島嶼部の考古学的様相」では、国家形成期にあたる前半から中国・朝鮮半島系の土器・陶磁器が散発的に流入する様相を明らかにし、後半では、中国産初期貿易陶磁に加え、初期イスラム陶器や国内では壱岐においてのみ確認される西アジア向け貿易品の中国産白磁が出土していることを提示。このような様相を、この海域が貿易船の寄港を介して東南アジア以西の遠距離の海域世界と連鎖的に結節していたものと評価し、考古学から「海域的様相」と意義づけた。この後の時代に続く、対象とする海域がもつ時代をこえた特性を主張する。

第2章「中世における九州沿岸部・島嶼部の考古学的様相」では、この地域の11～12世紀の港湾遺跡の発掘成果から、綱司銘などの墨書陶磁器や通常国内では流通しない大型銭などの出土状況に着目し、寄港や航路上貿易の可能性を指摘するとともに、国産土器と石鍋の出土傾向から、日宋貿易を背景として中央とも結びつく海上ネットワークの形成など、中世初期のこの海域を特徴づける海域的様相の活発な展開を指摘している。14世紀～15世紀にかけては、島嶼部を中心に東南アジア陶磁が顕著に出土する状況に着目し、倭寇の広範な活動を示すものとして倭寇関連遺跡と意義付け、この海域が東南アジアの港市貿易の活況を示す「商業の時代」(リード1993)に連動していたと評価した。16世紀では、針尾城、大村城下町、中世大友府内町跡などの遺跡で、タイ産褐釉四耳壺と福建産華南三彩が集中的に出土することに着目し、その分布状況や沈没船資料との比較から南蛮船の入港とその背景の新たな海域ルートとの結節を裏付けるものと評価した。これらの様相が、中世からの海域的様相の深化であるとし、この海域の特質であることを明らかにしている。文献史学が盛んに展開してきた海域史への考古学からの検証ともいえる成果である。

第3章「港市長崎の成立過程」では、開港以前から17世紀前半にかけての長崎につい

て考察する。開港以前においては、土坑墓や貿易陶磁など一定の生活痕跡が確認できるものの、まばらに人家があった程度と推測している。開港から16世紀末にかけての長崎は、簡素な掘立柱建物や排水溝、井戸などの遺構がみられ、これらで構成される「町」が誕生したことを明らかにする。遺物においては海外からの貿易陶磁が圧倒するなど、日常必需品を寄港する船に依存する島嶼部にも似た状況を明らかにし、発展過程の段階であると評価している。17世紀初頭から前半にかけては、遺構から都市としての機能の充実を指摘し、それと共に、ポルトガル船、唐船、朱印船に関連する遺物やキリシタン遺物、動物食を示す骨や日常用具の特異な出土状況から諸外国人との雑居状態を具体的に指摘する。これらは、「海域の様相」を特徴づける、貿易、キリシタン、諸民族雑居という特質を顕著に示しており、港市長崎の成立とその特性と主張する。独自の「長崎論」であり、考古学の資料考察が特徴を發揮する章である。

第4章「港市長崎の変容」では、17世紀後半以降の検討を行っている。17世紀後半に関わる発掘成果では、居留地や役所の周囲に石垣や堀などの区画施設が作られ、連動して市街からはキリシタンや外国人の雑居を示す遺物が認められなくなり、外国人との雑居状態が解消されたことを明らかにする。これらにより、自由貿易的な港市から機能が分化し、管理強化された貿易都市へ変容したと評価した。

結論では、各章における評価を踏まえた上で、「海域の様相」をキーワードに海域史における長崎の位置についてその変遷を段階としてモデル化する。すなわち「海域の様相」は、博多湾への航路上に存在した第1期と、それらを長崎が吸収した第2期、そして長崎が都市として変容する中で終焉していく第3期としてまとめる。

第1期、古代から中世にかけての貿易船は、鴻臚館や博多湾を目的地としていたが、その途上に位置し面的に展開する沿岸部や島嶼部は、貿易船の寄港や漂着の可能性を常に孕んでいた。また、島によっては、博多湾を目的地としない他の海域ルートと結節する可能性も存在した。「海域の様相」はこうした状況下で行われた小規模ながら自由で広範な取引や外国人との関わりを反映しているとしている。

第2期、港湾というにも及ばない状況であった開港以前の長崎が、16世紀後半にポルトガル船のために開港、町建てが行われると、日常用具の中国陶磁寡占が象徴するように他地域とは異なる「海域の様相」を示すに至る。さらに17世紀前半になると、貿易、キリシタン、諸民族雑居を示す考古資料が増加し、「海域の様相」を顕著に示す。これと対照的に、同時期に博多は国際貿易港としての地位を失い、その変化に伴い貿易船の目的地が変わることで、航路上から外れた九州沿岸部・島嶼部において「海域の様相」を示す発掘成果は消滅する。これを、古代から中世にかけての九州沿岸部・島嶼部が有した「海域の様相」を吸収し、長崎が港市として成立・発展したと意義づける。

第3期、その後、17世紀後半以降の長崎では、居留地や役所の整備が進み、堀・石垣などの区画施設が顕著となり、管理された都市として変容したことが明らかとなる。港市の中に取り込まれた「海域の様相」は、このような中で漸次終焉を迎えたと結論する。

## 論文の審査結果の要旨

川口洋平氏の学位申請論文「港市長崎の成立と変容－海域考古学研究序説－」は、アジア史の再検討として近年大きく展開している「海域史」という視点にたった、古代から中世、近世に及ぶ歴史考古学に視座をおいた研究であり、極めて長いスパンで日本と東アジア、東南アジア、ヨーロッパとの交流を、主として考古学の遺構や出土遺物の検討から描き出した労作である。本論の中核となる3章、4章では、港市長崎の成立過程と変遷に主眼をおき、その内容は、最新の「長崎」都市論であるばかりでなく、これまで城下町や三都を主たる対象としてきた日本の近世都市研究に、港市という新たなジャンルを加えたものとして今後諸学から注目されるものである。

川口論文に対し、審査委員が高い評価を与えた点は次の通りである。

①著者自らが主体的に発掘調査等により関わってきた長崎をはじめ、対馬・壱岐・五島などの九州西北海域の島嶼部、海岸部の考古学成果を統合することにより、海を共有して遠距離の海域世界と連鎖的に結節しているこの地域の特徴的な状況を指摘し、「海域の様相」と概念づけた。本地域の中世遺跡にみる東南アジア産陶磁器が多い特徴など、取り上げた個別具体的事象には既に指摘されていたことも含まれるが、川口論文では、こうした諸事象を、単に古代中世を前史とするのではなく、東南アジア以西との遠距離貿易を介した密接な関係という視点から、変遷する段階として統合し、この地域の長い時間のなかで海域の様相を描くことに成功したことである。

②本論文の主題である長崎については、開港を契機として港市長崎に集約され、顕著になる海域の様相を具体的に指摘した。多様な航路・寄港地交易・漂流といった面的な広がりをもつ古代・中世に特徴的な様相が、島嶼部から失われ長崎に吸収されたことに港市長崎成立を意義づけた。その実態については、例えば、島嶼部に指摘された生活財の中国陶磁寡占状況、長崎の町の広範囲にキリシタン遺物やウシ、ブタなどの動物食の残滓が分布する状況などから「諸民族雑居」、「海域の様相」などを具体的に指摘し、さらに長崎内の東南アジア産陶磁器の時間的、空間的分布状況の特質から朱印船貿易期に流入した新規商人の棲み分けと町構造の関連を説明する。この時期の港市の実態を考古学的方法によりモデルとして提示した最初の仕事であり、高く評価できる。

③港市長崎の変容では、キーとなる1663年の寛文長崎大火などに注目して、その前後の遺物構成や遺構の変化から、長崎の都市空間の変化と機能の変質、特に、「出島」・「唐人屋敷」などの居留地政策による「雑居」から「分離」への転換、諸役所整備による管理された貿易都市へという次段階への変化を跡付け、長崎を舞台にした「海域の様相」の終焉を説明する。これまで考古学的にまとまった歴史叙述がなされなかった長崎に関して、単なる調査成果の呈示にとどまることなく、東シナ海、南シナ海を舞台とする海域規模での位置づけをおこなった。今後、長崎という単独の都市研究にとどまらず、文献史学が主導してきた「周縁の世界」、「境界人」、「倭寇的状况」などのキーワードで説明される海域史研究に新たな視座と協業の拠点となるものと評価

される。

④さらに付章では、倉庫、沈没船など、長崎や平戸などの流通に直接関与した遺跡遺構の出土品に特有の、限定された時間とベクトルを属性としてもつ「流通資料（遺物）」の概念と、それらを援用した「海域考古学」研究の方向性と可能性を提案している。資料論、方法論としても、今後の学界における新たな展開を期待できる。

以上のように、研究史を踏まえた目標の先進性、学際的な視点、現時点における考古学成果を軸にした的確な分析と到達点としての仮説と方法論の提示など、これらを総合的に評価し、審査委員は一致して学位請求論文として十分であると認めた。

審査委員が今後の課題として期待したい点は、以下のとおりである。

①一部に文献史学により呈示された概念の援用によって、それを前提、既定のものとして論がたてられ記述された部分があるが、歴史考古学として考古学資料とその分析方法を主軸にすることが本論文のオリジナリティーをより発揮するものと考えられる。また文献史学をはじめ既存の成果をどのように批判的に継承したのか、考古学資料により何を新構築したかについて、さらに展開することを期待する。

②本論文は、海域史の視点による九州北西域を対象とした成果であるが、論旨の核となる「海域的様相」などの重要な概念については、他地域も含め一般化される概念として明確化し、より深めること、また、「海域考古学」として、長崎にとどまらずに、今後、東シナ海をめぐる他地域を含めた展開を期待したい。